

IV-23

17世紀初頭における水害と秋田藩の開発に及ぼした雄物川
河口付近の河道について『梅津正景日記』の検討を対象一

秋田大学鉱山学部 正会員 伊藤芳昭

1、はじめに

『幕藩制成立史の研究』によると、日本では河川堤防工事件数の半分近くが戦国期から近世初期に集中し、この時期は国土水田化の画期であるとしている。戦国大名・佐竹氏が国替えを命じられたのは丁度この頃のことである。『明治以前の土木史』では、その時期の雄物川河口付近の河道改修について、「老臣梅津主馬正景は交通の便を謀り、川尻より北方に新川を開鑿して現在の流路に改めた」としている。本論ではその実態を探るため、鉱山史では「秋田藩に残された若干の記録文書は稀有の例に属する」とされている『梅津正景日記』（以後は『日記』）に着目し、土木史、災害史の視点からその検討を行なう。

2、17世紀初頭の天候

『日記』は1612～1633年までの21年間の記録である。正景31歳から亡くなる52歳までの時期にあたる。天候について継続して記載されるようになったのは1618年以後のことである。（図-1）

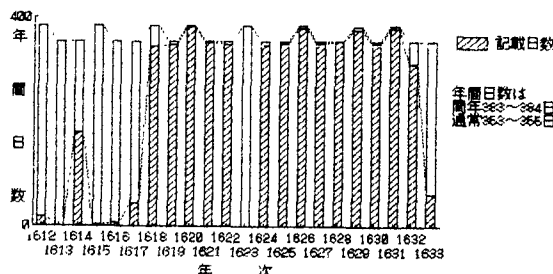


図-1 正景日記における天候の年次別記載日数

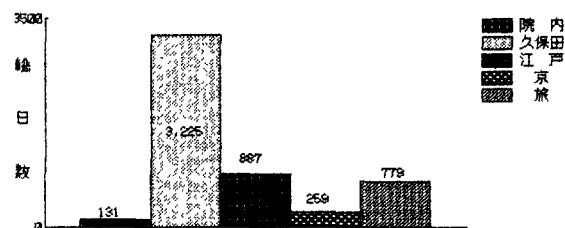


図-2 天候の地域別記載日数

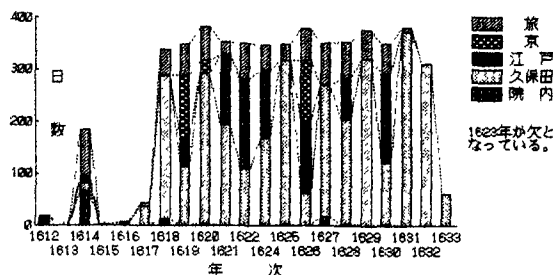


図-3 天候記載の年次別内訳

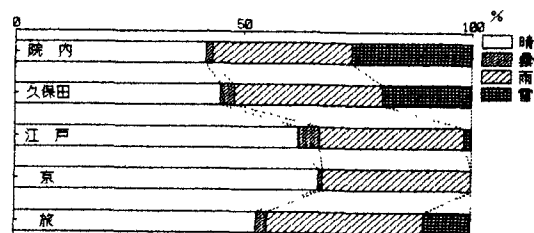


図-4 天候の概況

正景は秋田藩内の院内、阿仁、荒川鉱山などの監督、開発の一方で、領主・佐竹義宣のブレーンとして、江戸、京での生活や、旅の経験も豊富であった。院内では在任期間に比べて天候の記載日数は少ない。旅の中には山形30日間、駿府12日間の長期滞在を含んでいる。（図-2、図-3）江戸、京での滞在中には風の強い晴の日が比較的多い。久保田は雨、雪それに風が強く、雷も多い。旅では風雪に遭遇することも多かった。（図-4、図-5）

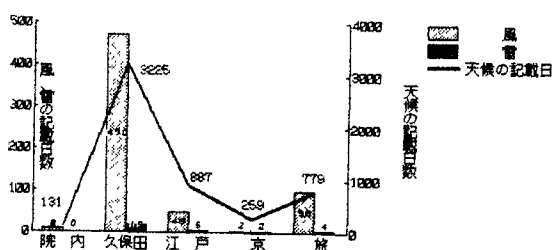


図-5 風、雷の記載日数

21年間に大雨の日は60日である。大雨は梅雨から台風シーズンにかけての8～9月に集中している。久保田における1月、2月各一回の大雨は、1631年のことである。この年は1月末日から晴、あるいは雨の日が続いている。(図-6)



表-1 水害、地震の年月日

発 生 月 日 (旧 暦)	場 所 区 別
1613. 2. 1 慶長17.12.12	院 内 水 害
1619. 4.25 元和 5. 3.11	江 戸 地 震
1624. 7.12 寛永元. 5.27	久保田 水 害
1627. 4. 2 寛永 4. 2.16	久保田 水 害
1627. 7.13 寛永 4. 6. 1	久保田 地 震
1630. 8. 1 寛永 7. 6.23	江 戸 地 震
1631. 4.19 寛永 8. 3.18	久保田 地 震
1632. 7. 8 寛永 9. 5.21	久保田 水 害
1632. 8. 9 寛永 9. 6.24	久保田 水 害

場 所	大 雨	水 害	地 震
院 内	4	1	0
久保田	24	4	2
江 戸	13	0	2
京	2	0	0
旅	17	0	0
小 計	60	5	4

新宝町 (1946.5.12) 建設省地理院調査 (大塚資料)

0.2 km (1917-1936)

石田町

目黒山

岩見川

『日記』には水害、地震による雄物川の河道変動や、大規模な河川改修の記録は見あたらない。わずかに元和6年2月15日(1620.3.18)の条に「石田坂ヨリ目長田町間、川欠・道切候」がみられる。雄物川対岸は最上領であったことを考慮すれば、小規模な補修とみられる。河口付近の大改修は、1622年、最上藩とりつぶし・知行地引き換えによって可能になったと考えられる。以上のことから、正景によって、「川尻より北方に新川を開鑿して現在の流路に改めた」としたことは、確認できなかった。その経済的效果からいえば、正景の兄・梅津半右衛門憲忠と、その二代忠国、三代利忠を中心に実施された雄物川直流水工、岩見川を水源とする仁井田堰開鑿の方がはるかに大きく、正景の工事とされている地域はその延長工事とも考えられる。(図-7)

【謝辞】本研究を行なうにあたって貴重な資料、助言をしていただいた秋田大学武藤哲男技官、白石建雄助教授、梶川正弘教授、清水浩志郎教授、木村一裕助手の各氏には感謝の意を表します。